

小論文 問題

次の文章を読み、第一問および第二問に答えなさい。

投票で「多数の人々の意思をひとつに集約する仕組み」のことを集約ルールという。多数決は沢山ある集約ルールのひとつに過ぎない。そして、投票のない民主主義はない以上、民主主義を実質化するためには、性能のよい集約ルールを用いる必要がある。

確かに多数決は単純で分かりやすく、私たちはそれに慣れきってしまった。だがそのせいで人々の意見が適切に集約できないのなら本末転倒であろう。それは性能が悪いのだ。もし「一人一票でルールに従い決めたから民主的だ」とでもいうのなら、形式の抜け殻だけが残り、民主的という言葉の本身は消え失せてしまうだろう。投票には儀式性が伴っても、それは単なる儀式ではない。聞きたい神託ではなく人々の声なのだ。

さらにいえば、有権者の無力感、多数決という「自分たちの意思を細かく表明できない・適切に反映してくれない」集約ルールに少なからず起因するのではないだろうか。であればそれは集約ルールの変更により改善できるはずだ。

多数決を含む集約ルールの研究は、フランス革命前のパリ王立科学アカデミーで本格的にはじめられた。主導したのは二人の才人、ボルダとコンドルセである。彼らの議論は二〇〇年以上前になされたものだが今なお斬新で、この本質を突いたものだ。

一七七〇年のフランスではルイ一五世が国王の座に就いている。まだ革命は起こっていないが、これは後に一九世紀前半の歴史家トクヴィルが

「旧体制」と名付けた時代の末期にあたる。フランス

の国家財政は悪化し、外交上の劣勢は著しく、絶対王政を支える組織と文化の基盤はほころび始めていた。ルイ一六世とマリー・アントワネットが婚礼の儀を執り行ったのはこの年だ。

その六月にパリ王立科学アカデミーで、ジャン・シヤール・ド・ボルダが多数決についての研究報告を行った。ボルダは騎士の称号を持つ貴族で、教理に長けた海軍の科学者である。

ボルダが指摘したのは次のようなことだ。いま一人の有権者が投票用紙に一人の名前を書く、いわゆる普通の多数決を考えてみよう。有権者は21人、選挙の立候補者は「X、Y、Z」の3名だ。そして結果は「Xに8票、Yに7票、Zに6票」だったとする。多数決で勝つのは最多の8票を獲得したXだ。

この結果によれば、有権者のうち8人がXを、7人がYを、6人がZを1位と判断したわけだ。だがもし彼らが2位以下を表のように考えていたとしたら、勝者がXとなる

のは果たして適切だろうか。表の読み方だが、Xに投票した8人、つまりXを1位とする8人のうち4人がX Y

表

	4人	4人	7人	6人
1位	X	X	Y	Z
2位	Y	Z	Z	Y
3位	Z	Y	X	X

Z、残る4人がX Z Yと選択肢を順序付けている。また、Yを1位とする7人は皆Y Z X、Zを1位とする6人は皆Z Y Xである。

なるほど確かにXは最多の1位を集めている。だがここでXを「多数意見の尊重」と考えてよいものだろうか。というのは有権者21人のうち13人、約6割がXを最下位の3位にしているからだ。彼らの1位がYとZに割れたから、Xが多数決で最多票を得られただけではないか。

このことをボルダは「2人のアスリートが疲れきってしまった後で、第三の最も弱い者に負けてしまうようなものだ」と表現した。ボルダはこの「第三の最も弱い者」という感覚に、次のような定式化を与える。

ボルダはXが、YにもZにも、ペアごとの多数決で負けることに着目した。具体的に、XとYで多数決をすると、Xを計8人（X Y Zの4人とX Z Yの4人）が支持するが、他の13人（Y Z Xの7人とZ Y Xの6人）はYを支持する。つまり、XはYに、8対13で負けるわけだ。同様に、XはZにも、8対13で負ける。

つまりXは、ペアごとの多数決で、YにもZにも負けてしまう。このように、ペアごとの多数決で、他のあらゆる選択肢に負けてしまう選択肢のことを、ペア敗者という。Xはペア敗者という「第三の最も弱い者」であるにもかかわらず、全体での多数決だと最多票を得て勝利してしまうのだ。

ペア敗者という定式化を得たのは分析を進めるうえで大きい。これによりペア敗者を選ばない、多数決とは異なる集約ルールを見付けようという方針が明確になるからだ。

ボルダが考えたのは次の集約ルールで、今ではボルダルールと呼ばれている。それは選択肢が三つの場合、1位には3点、2位には2点、3位には1点と加点をして、その総和（ボルダ得点）で全体の順序を決めるやり方である。

A

この例に限らず、有権者が何人でも、選択肢が何個でも、そして有権者の選択肢への順序付けがどのようであっても、ボルダルールはペア敗者を選ばない。つまり「いかなるときもペア敗者を選ばない」という規準、ペア敗者規準を満たすわけだ。その意味でボルダルールは集約ルールとして性能がよい。

（出典：坂井豊貴『多数決を疑う―社会的選択理論とは何か』岩波新書 二〇一五年。なお、文章の一部を省略・変更してある。）

第一問 ボルダルールに従うと、表の投票結果から誰が代表者に選ばれますか。考えた筋道が分かるように、Aに入る文章を二〇〇字以内で作りなさい。（縦書き。）

句読点も字数に加える。半角数字は二ケタを1マスに書くこと。）

第二問 多数決について、傍線部①のような意見があります。あなた自身はどのような集約ルールが望ましいと思いますか。制度、現状などを具体的にあげながら、あなたの意見を四〇〇字以内で論じなさい。（縦書き。句読点も字数に加える。）